

200年の時空間を越えて— ジェイン・マーセットの『経済学対話』(1816)

経済学部 講師 吉野成美

もし近畿大学に赴任していなければ、決して実現しなかったであろう多くの素晴らしい人々との出会いの中に、私は歴史上の人物ジェイン・マーセット (Jane Marcet : 1769-1858) とのそれを含めたい。2005年の4月、英語教員として本学の経済学部に着任した私は、ふとしたきっかけで、本学図書館の貴重書コーナーに所蔵されている一冊の本、『経済学対話』(1816)を紹介され、それを読んでいく過程で、著者であるジェイン・マーセットなる人物に次第に惹かれていった。

ジェイン・マーセット—彼女はビクトリア朝の英国に生き、化学、経済学、植物学、物理学、神学、そして言語学など、実に多分野にわたってそれぞれの学問に関する教本を著し、それらの著書を通して英国のみならず、アメリカやヨーロッパの国々における青少年の教育に大きく貢献した女性著述家である。その名前は、彼女の生きた時代にはそれなりの知名度を保っていたようであるが、彼女自身が持ち合わせていたと思われるビクトリア朝の女性らしい謙遜のためか、あるいはその著書が多岐にわたりすぎ、各学問領域に分断されて紹介されてきたためか、21世紀の現在、ジェイン・マーセットを知る人はきわめて少ない。しかしながら、ひとたび彼女の著書をひもとけば、そのテキストからすけてみえるのは貞淑かつ寛容、そして博学才知な淑女という、きわめて魅力的な女性像なのである。

『経済学対話』は、当時、公的な教育機関において経済学を勉強する機会に恵まれなかった女性たちを対象に、経済学をわかりやすく解説した教本である。出版当時、これは大変な人気を博し、イギリス国内のみならずヨ

ーロッパ大陸でも翻訳本が出回り、アメリカでも版を重ねたベスト・セラーになったという。だが、彼女が著したのは「教本」であり、作者自身のうちたてた理論に基づく研究成果が発表された「学術書」ではなかった。事実、マーセットは、自ら経済学に精通し、リカードやマルサスといった同時代の著名な経済学者と学術的な親交を持ちはしたものの、「経済学者」として西洋経済学史にその名を刻むことはなく、ゆえに経済学史における彼女の経済学大衆化への貢献という大きな功績も、特にその死後、徐々に評価の対象とすらならないほどに、歴史の片隅に置き去りにされていった。

このように、今となってはほとんど忘れ去られた存在であるマーセット夫人だが、彼女の『経済学対話』の出版には、経済学史において大きく二つの意味で重要な要素があったと私には思われる。一つは、著者が女性であったこと。19世紀前半の英国にあっては、経済学に限らず、ほとんどすべての学問分野において女性は公的な教育機関を通しての知へのアクセスを阻まれており、ゆえに学問的知識を備えた女性の文筆家はまだまだ珍しい存在であった。また、仮にすばらしい内容の著書を発表したとしても、社会的・政治的な後ろ盾がない限り、著者が「女性である」ということは、それだけで純粹で客観的な読者の評価を得るのをことさらに難しくする時代でもあった。そして、このように珍しい存在であった女性としての文筆家マーセットが想定読者として選んだのが主に結婚前の10代の女性たちであったということが、もう一つの重要な意味をもってくるのだ。知へのアクセス

を阻まれた環境にあったはずの女性の著者が、同じく知へのアクセスを阻まれている後続の女性に対して「経済学」を流布させる目的で書かれた教本—『経済学対話』は、実のところ、西洋経済学史において画期的な意味を持った書物であるといえるのである。

マーセットの貴重な初版を実際にひもといて、ディテールを確認してみよう。表紙をめくって最初のページには、CONVERSATIONS ON POLITICAL ECONOMY : IN WHICH THE ELEMENTS OF THAT SCIENCE ARE FAMILIARLY EXPLAINED. というタイトルがまずあるが、その下に本来あるべきはずの著者の名前は書かれておらず、かわりにBY THE AUTHOR OF "CONVERSATIONS ON CHEMISTRY." (『化学対話』の著者による)とだけ記されている。(写真①を参照)



写真① 近畿大学中央図書館所蔵の
J. Marcet, *Conversations on Political Economy*
 (『経済学対話』)の最初のページ。

『化学対話』はマーセットが1806年に匿名で(ただし女性であることは明かしていた)発表したデビュー作であり、化学についてわかりやすく解説して人気を博した教本であった。『化学対話』の成功に自信をつけたマーセットは、自身の二作目が一作目と同一の作者であることを明記することで、これまでに獲得した読者の定評を利用したいと考えたのだろう。ただしその一方で『化学対話』の際の匿名性をも保持することで、著述家としての自身の名前をいまだ公にしない選択をしたのである。文筆家として、また女性として、自身のキャ

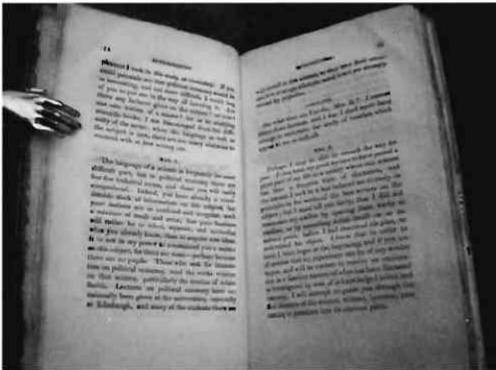
リアや知名度よりもまず、読者の受容性を優先しようという彼女の慎重な姿勢がこの選択に垣間見えるといっは大げさだろうか。ともかくも、『経済学対話』の著者がジェイン・マーセットであることが公になるのは、初版が発表されてからおよそ20年後の1837年になってからである。

教本の内容にもふれてみよう。前にも述べたように『経済学対話』は当時、公的教育機関で高等教育を受けることがまだ許されていなかった10代の女性たちが経済学に無理なく馴染めることをとりわけ意図して書かれた教本であった。その仕掛けはまず、この教本が「教本」というよりはむしろ「物語」のような舞台設定の上になりたっているところであって、この本では、無邪気で知的好奇心旺盛な少女キャロラインを聞き手に、博識高い女性教師B夫人が経済学を講義するという「おしゃべり」のような対話形式で全体が構成されている。実際、この教本を読んでいると、私は経済学についての講義内容そのものよりその周縁部分のことが気になって仕方がない。例えば、B夫人とキャロライン、この二人はどこでこの対話を繰り広げているのだろうか?という疑問がふと脳裡をかすめる。『化学対話』の設定では講師B夫人の講義を聞くのはキャロラインともう一人、姉のエミリーが存在した。『化学対話』で化学の勉強を一通り終えた二人のうち、キャロラインだけが「(化学の)次は経済学を学びましょう」とB夫人に促され、再び勉強することになっている。今回はエミリーが不在とはいえ、設定としての姉(という家族)の存在は、なんとなく家庭的でカジュアルな雰囲気を示唆していて、ひょっとしてB夫人はこの姉妹の家に雇われている家庭教師で、この教本での講義はすべてキャロラインの自宅で行われたのだろうか?と想像をめぐらせたりすることが可能である。読みすすめていけば後になってキャロラインの他愛ない発言から、彼女の家では庭師も雇っていることが判明するので、ここのお宅は家庭教師を雇うくらいの経済力をもったそれなりの家

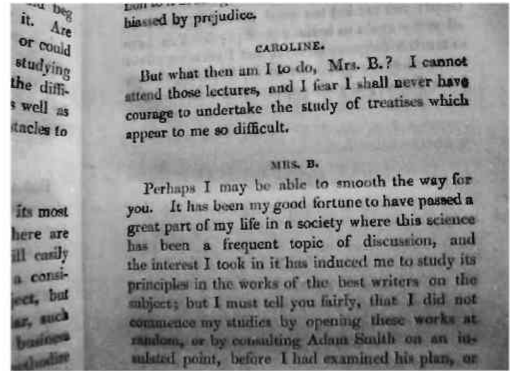
庭であろうと推察することもできて、なんとも楽しいのである。

とはいえ、B夫人とキャロラインの「おしゃべり」は決して無秩序に行われるものではない。毎回の講義（レッスン）は章ごとに分けられていて、各章の最初では「前回のレッスンでは〇〇を学びました。それをふまえて今回は××を学びましょう」といった具合に、さながら習い事のように段階を経て、経済学を少しずつ習得していくように予め仕組まれている。そしておそらく、こんな楽しい工夫が施された教本であるからこそ、この教本を手にとったであろう当時の若い女性読者たちは、自分たちととても似た境遇にあるキャロラインに自己を投影させた上で、B夫人の講義を「読み」、キャロラインと同時進行で経済学の知識を学ぶことができたのである。

単なる物語設定とはいえ、マーセットは序章のところでも、B夫人がこのように私的レベルで教え子キャロラインに経済学を講義することになる背景をきちんと説明している点も見逃せない。次の二人の会話はその部分である。（写真②と③を参照）



写真② 同書物の14-15ページ。本文中に引用しているキャロラインとB夫人の対話が掲載されている。



写真③ ②で示している15ページの拡大写真。

B夫人：

経済学の講義は大学で、特にエディンバラで受けることができます。そこでは学生さんの多くがこの科目に精通しているのですけれど、それはまだ偏見で凝り固まらない若いうちにこの学問を学ぼうとしたからなのです。

キャロライン：

でも先生、それじゃあ私はどうすれば良いのでしょうか？私はこういった大学での講義に出席することを許されてはいません。それに、私にはとっっても難しすぎるような論文を一人で読み始める勇気も残念ながら、もちあわせていませんし。

女性が「大学での講義に出席することを許されてはいなかった」当時の様子がこのキャロラインのセリフにしのばれる。だがマーセットはここで、社会の不平等を疑問視したり、もしくは女性の教育を受ける権利を主張するといった発言を避け、かわりにB夫人に次のような解決方法を提示させることで自身の教本の意義を際立たせるのだ。

B夫人：

もしかしたら、私があなのお役に立てるかもしれないわ。幸運なことに、私はこの分野の勉強がさかんに議論されるような環境に長らく身をおいてきました。そして、その中で面白いと感じたことがきっかけで、この学問に関して書かれた素晴らしい著者たちによる作品を通してこの学問の原理を勉強してきた

のです。

公的な教育機関に頼らずとも、既にB夫人は経済学が「さかんに議論されるような環境に長らく身をおいて」その「原理を勉強してきた」才女なのである。同じ女性であるキャロラインにとって、そして彼女に自己投影して経済学をこれから学ぼうとしている女性読者にとって、B夫人（と彼女の背後に存在するマーセット夫人）はなんと頼もしい人生の先輩ではないだろうか。

マーセットが経済学を若い女性たちに広めることを意図してこの本を発表した1816年からおよそ二世紀が過ぎようとする中で、当時、英国の書店に並んだうちの一冊が、おそらくは様々な所有者を介した後に、海を渡ってはるばる日本の近畿大学にやってきた。男女を問わず、学部を問わず、学びたい者が学びたい学問分野を専攻することができる200年後の異国の大学で、自分の書いた本が読まれることになろうとは、当時のマーセット夫人は想像だにできなかったであろう。そんな異国の大学の、経済学部に所属する一女性教員として、私自身はマーセット夫人とその『経済学対話』に出会えたことを貴重な縁だと思っている。

